


## 海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	和田 聡朗 
所属機関	京都大学医学部附属病院
・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名	2018年 米国結腸直腸外科会議
渡航期間	自 2018/5/18 至 2018/5/24
・研究内容 ・国際学会・会議内容	The effects of intraoperative ICG fluorescence angiography in laparoscopic low anterior resection: a propensity score-matched study
<p>研究成果 (要約: 800字)</p> <p>下記研究内容について2018年 米国結腸直腸外科会議にてE-poster 口頭発表をおこなった。</p> <p><b>【背景】</b> 縫合不全は直腸癌手術において最も深刻な合併症のうちの一つである。縫合不全を防ぐ要因のひとつに吻合部腸管の血流が関係している。ICG 蛍光造影法を用いた腸管血流評価はリアルタイムに腸管血流評価を行うことができる。しかし、腸管への術中 ICG 蛍光造影が縫合不全を減らすかどうかははっきりとした結論はでていない。</p> <p><b>【方法】</b> 京都大学医学部附属病院消化管外科において2009年1月～2016年5月まで直腸癌にて腹腔鏡下低位前方切除術 (DST 吻合) を行った149症例の後ろ向き研究。2013年8月以降の連続48症例には術中 ICG 蛍光造影を行った。術中の ICG 口側結腸の血流評価の有無をプロポーションスコアマッチングを使用し各群をマッチさせた。縫合不全率と単変量解析、多変量解析を用いて縫合不全のリスク因子もまた評価を行った。</p> <p><b>【結果】</b> プロポーションマッチング後各群 34 症例がマッチした。ICG 有り群の縫合不全率は 8.8% (3/34)、ICG 無し群の縫合不全率は 14.7% (5/34)、(P=0.71)</p> <p>単変量解析では BMI (P=0.017)、術前化学療法 (P=0.042)、側方郭清 (P=0.0015) が縫合不全と有意差をもって関係を認めた。多変量解析においては側方郭清が縫合不全と有意差をもって関係を認めた。(odds ratio [OR], 10.05; 95% confidence interval [CI], 1.75 - 58.61; P = 0.011).</p> <p><b>【結語】</b> これは直腸癌に対して DST 吻合をおこなった腹腔鏡下低位前方切除術においてプロポーションマッチングを用いて ICG 蛍光造影の効果を評価した最初の発表である。縫合不全の発症率において有意差はでなかった。多変量解析において側方郭清が縫合不全に関係していた。術中の ICG 口側血流評価が腹腔鏡下低位前方切除術の縫合不全を減らすかもしれない。</p>	